

自由投稿

段落を構成する文の集合体に関する一考察

船水周

柴田学園大学 生活創生学部 こども発達学科

A Study on the Aggregate of Sentences That Make Up a Paragraph

Hirosi Funamizu

Department of Child Development and Education, Faculty of Human Life Design, Shibata Gakuen University

Key words: 統一性 unity
結束性 cohesiveness
意識性 consciousness

要旨

段落指導の現状を改善するには、パラグラフの規則性に倣って、段落の主題の統一性と文の結束性に気付けさせる工夫が必要である。本来、省略表現や文と文の間にはギャップがあり、意味が通りにくい。意味が通るようにするためには、読み手が想像力でそのギャップを埋めていかなければならない。

また、書き手は、理解を妨げる接続表現の多用を避けるために、文脈による接続にも積極的に挑戦していくことが求められる。明瞭な論理展開は、確かな考え（結論・主張）と、それを支える文の集合体が緊密につながることで可能になる。

有力な方法の一つとして、まず、段落の冒頭にトピック・センテンスを置くこと。次に、接続表現や指示表現、省略表現など、文と文の接続方法を知り、効果的、継続的に使っていく意識が求められる。パラグラフの要素を段落指導に活かしていく意味もそこにある。

はじめに

論文やレポートに求められるのは、論理的文章である。論理的文章は、書き手の伝えたいこと（結論・主張）が読み手によく伝わる文章を意味する。誤解や矛盾を生じさせない、一本筋が通っている文章である。それは、序論・本論・結論の三部構成で書くことが基本とされ、読み手を説得するための型として欠かさないものになっている。たとえば、書き手が自分の考えた順番で論理を展開しても、読み手に理解され、納得してもらえないとは限らない。むしろそうなることは低いのが普通である。

論文やレポートに求められる型を知らずに、あるいは知っていても、自分本位の伝え方をしたならば、読み手に正しく受け止めてもらえないようにはならない。挙句の果てに、自分が意図する方向に読み手を導けなかったとしたら、せっかく書いたレポートにもかかわらず、意味が見いだせなくなってしまう。

学生が提出したレポートを読んでいると、どの学生にも共通する問題があることに気付く。それは二つに絞られる。一つは、文章と段落の関係が明確に意識されずに書かれていることである。それはタイトル

に整合した見出しが付けられていないことで分かる。もう一つは、段落を構成している文の集合体、つまり、文と文との関係が意識されずに書かれていることである。それは段落を統一する主題文がなかったり、一文一文が秩序なく並べられたりすることで分かる。両者は別々の問題ではなく、相互に関連している。しかも後者の問題にこそ、論理的文章を書けなくする、致命的な要因がある。

言い換えれば、一つの段落を構成する一文一文を、論理的につなげられるようになれば、文章全体の論理性が担保される、という仮説が設定できる。

このような仮説の実現は、英語のパラグラフ・ライティングに学び、日本の段落に相当するパラグラフの知見を適切に取り入れることで可能になる。本小論は、先行文献と授業実践(「論作文技術」)を基に考察した結果を述べることを目的としている。

1 論理的文章

1・1 パラグラフの要素

木下是雄 (1994) ¹ はパラグラフを次のように説明する。

「文章の一区切りで、内容的に連結されたいくつかの文から成り、全体として、ある一つの話題についてある一つのこと(考え)を言う(記述する、主張する)ものである」

また、佐渡島沙織・吉野亜矢子 (2014) ² は、パラグラフをこう説明する。

「日本語の『段落』と、英語の『パラグラフ』の大きな違いは、『パラグラフ』には構造がしっかりなくてはならないということです。日本語の段落が、文章を書くとき息つぎに似たようなものであるとすれば、パラグラフは、一つの中心文(トピック・センテンス)をサポートする文(情報)の塊です。

パラグラフを書く上では構成が大切になります。一つのパラグラフで一つの情報だけを扱います。パラグラフの頭に、そのパラグラフの目的が明らかになるように中心文を書いた後、その他の情報を入れて一つの情報の塊を作ります」

さらに、橋内武 (1995) ³ によれば、パラグラフは、次のような説明になる。

「パラグラフの構成は、主題文と支持文の組み合わせからなると捉えることもできる。(場合によっては、末尾に結語文が付く。)(1) 主題文(topic sentence) : そのパラグラフで問題となる主題(topic)を示し、それについて書き手が一番言いたい意見・考え(controlling idea)を表明する。これは、パラグラフの中で、もっとも総括的な文であり、カギになる重要な文である。意味の上では、仮定や意見や疑問を提出したり、事実を陳述したりする。(2) 支持文(supporting sentences) : 主題で陳述したことを読者に納得してもらうために、実例や証拠や理由を詳しく述べるものである。(3) 結語文(concluding sentence) : パラグラフが終わることを示すと同時に読者に一般的なメッセージを与える。これには、次の方法がある。① 主題文を別の表現で言い換える。② パラグラフの要点をまとめる。③ 主題から引き出せる一般論を一言で書く。主題文を兼ねることもある。」

以上、三者の説明からパラグラフの輪郭が明確になってくる。要点をまとめるとこうなる。

- ① パラグラフは日本語の段落に似ている。しかし、明確な構造が意識されている点で段落と大きく異なっている。段落が息継ぎのような区切り方をするのは明らかに違う。
- ② 一つのパラグラフには、一つの話題があり、一つの考えが述べられている。
- ③ パラグラフは、一つのトピック・センテンス(主題文)とそれを支える複数のサポーティング・センテンス(情報文)で構成される。
- ④ パラグラフは、冒頭にトピック・センテンス(主題文)が置かれ、それを説明するよういくつかの情報が有機的につながっている。
- ⑤ パラグラフの末尾に結語(結びの文)を付ける。これは場合により省略できる。

論理的文章を書く場合、どう書けば「論理的」になるのか、イメージが描けなければ書き出すことができない。逆に、こう書けば「論理的」になる、という確信がもてれば、書き出せるようになる、ということでもある。それには、パラグラフがもつ構造を知り、活用することが効果的である。具体的に言えば、パラグラフを通して、文と文を有機的につなげる知識や技能、感覚が身に付けていく。

パラグラフは200~300字が標準である。つまり、文章はパラグラフを基本単位として組み立てられる。したがって、この文字数の中で、いかに論理的に文をつなげていくか、工夫が必要になる。

【パラグラフの例文】

〈トピック・センテンス〉 私が今の会社に満足している理由は3つある。

〈サポーティング・センテンス〉 1つ目は、働きやすい職場環境であるからだ。たとえば、フレックスタイムで自由に始業・終業時刻が決められる。さらに、リモートワークで自宅勤務することも可能である。2つ目は、職場に思いやる雰囲気があり、魅力的な人がいるからだ。たとえば、人の足を引っ張る人や陰口をたたく人がいない。3つ目は、今の仕事にやりがいを感じるからだ。たとえば、今の会社は、新規事業に前向きで、チャレンジしたり研修したりする機会に恵まれている。

〈コンクルーディング・センテンス〉 結論として、私は、今の会社で、働きやすい職場環境、職場の雰囲気、仕事のやりがいなどに十分満足している。

1・2 パラグラフと段落

文は一組の主語と述語で思想（まとまった考え）を表す。段落はいくつかの文が集まり、小主題を表す（形式上、冒頭が一字下げになっている）。文章はいくつかの段落が集まり、統一された大主題を表す。

例外を別にすれば、「文」「段落」「文章」は、このように定義できる。論理的文章を書くときには、こうした大枠的な捉え方が欠かせない。なぜなら、文も、段落も、文章も、それぞれ関連しているからである。たとえば、上記の「段落はいくつかの文が集まり」「文章はいくつかの段落が集まり」という表現にしても、単に集められて、並べた状態を指すのではない。それらは連続し、有機的に結びついていることを指す。

言い方を変えれば、必要性があり、適切に結びついていなければならない。「文」「段落」「文章」が、それぞれ複数の構成要素からなる構造体であるならば、それは当然といえる。

橋内武（1995）³ は、パラグラフについて、こうも述べている。

「パラグラフを書く上で注意しなければならないのは、その構造と展開法だけでなく、テキストとしての〈統一性〉と〈結束性〉である。〈統一性〉(unity) とは、1つの話題に限って述べるということである。〈結束性〉(cohesion) とは、語と語、文と文、文段と文段が巧みに結びついてテキストを作り上げることをいう」

また、森岡健二（1989）⁴ は、段落について、次のように説明する。

「段落は、それぞれの部分的な主題、つまり、小主題に関して設けられるが、その小主題をあらわす文を、トピック・センテンス（小主題文）という。トピック・センテンスは、説明文や論文などでは、明白に段落中に書きあらわすのが普通であるし、実際書きあらわすことが望ましい」「段落は、まとまりが必要である。それには段落を一つの小主題で統一しなければならない。その方法として、a トピック・センテンスを文章のはじめ、なか、おわりのいずれかに置く、b 文と文のつながりを緊密にする、の二つが考えられる」。そして、よくまとまっている段落は、文と文とが堅く結ばれているとし、接続の方法として、「代名詞」「接続語」「繰り返し」「時間の経過」「空間の連続」などをあげている。

両者の説明には、パラグラフと段落の違いはあるが、トピック・センテンスの言葉が使われている点では共通している。（トピック・センテンスは、話題文、主題文、中心文と邦訳されている）。そして、パラグラフも段落も、一つの小主題で統一しなければならないこと、パラグラフや段落を構成する文のつなが

りに結束性、または、緊密性が必要であることが述べられている。

以上の点から考えると、森岡（1989）⁴ が使用している段落という言葉には、パラグラフの意味合いが色濃く反映されていると解釈できる。ただ、森岡がトピック・センテンスの位置を、「はじめ、なか、おわりのいずれかに置く」と述べている事実から、従来の段落の意味合いを払拭しているわけではないことも指摘できる。むしろ段落という言葉積極的に使っていく意図が感じられる。

根拠の一つに、日本においては、文章構成の形式を、頭括式、尾括式、双括式など、統括する（バラバラのものを一つにまとめる）機能を基に説明してきた歴史があるからだ。しかも、頭括・尾括・双括の言葉は、五十嵐力『新文章講話』（1909）⁵ でも用いられている。文章組織の形式として、説明している五種類のうち三種類が、頭括・尾括・双括に当たる。五十嵐は、次のように述べている。

「第三 頭括式は、文の劈頭に全体を括るべき大綱を掲げて、次ぎに大綱の中に含まるる事物を挙げるもの、但し事実例証等を挙げるだけで文尾において括りをつけぬ方式である。第四 尾括式とは、初めに幾多の事物を列挙し、結尾に至ってこれを統べ括る方式をいう。第五 双括式とは、前に綱領を掲げ、これを絮説して後、結尾に再びこれを統括する様式である。」

こうした頭括式、尾括式、双括式は、現在でも論理的な文章の構成法（型）としてよく使われる。結論（意見・主張）を最初に置くか、最後に置くか、最初と最後の両方に置くかで分類される。これはパラグラフの考え方と照応する。つまり、頭括式はトピック・センテンス（主題文）を最初に置いたもの、尾括式はコンクルーディング・センテンス（結語文）を最後に置いたもの、そして、双括式はトピック・センテンス（主題文）を最初に、コンクルーディング・センテンス（結語文）を最後に置いたものと解釈することができる。また、これらの構成パターン（型）は、文章における段落のつなげ方にも、段落における文のつなげ方にもよく活用されていた。

2 段落意識

2・1 段落指導の課題

パラグラフは、一つの小主題で統一された文の集合体である。パラグラフを構成する一文一文は小主題のもとで有機的につながっている。この構造は基本的に段落でも同じである。ただし、段落はパラグラフと違い、文の集合体が一文だけの場合もある。内容の上で区別できる部分があれば、一文だけでも段落が構成できるとする。段落の内容を大きくまとめるか、小さくまとめるか、段落をどのようにまとめるかは書き手に任されている。これがパラグラフと大きく異なる点である。

段落に求められる規則はあくまでも原則である。原則は例外を前提とする。したがって、書き手は段落のまとめ方を自由自在にできる。確かに、自由で融通が利くことは使い勝手が良い。制約されることがない、あるいは少ないためである。しかし、この点が段落の定義を曖昧にしていることも否定できない。パラグラフのように規則性を厳しく求めないことが、逆に、段落を意識しないことへつながる。

新小学校学習指導要領（2018）⁶ によれば、国語科で段落の指導が始まるのは小学校3・4年である。指導内容を抜き出すと、「改行の仕方を理解して文や文章の中で使う」「主語と述語との関係、修飾と被修飾との関係、指示する語句と接続する語句の役割、段落の役割について理解する」「書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考える」「自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫する」。もちろん、これらは1・2年の内容を基礎にしている。「自分の思いや考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考える」「語と語や文と文の続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫する」「時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉える」などである。

学習指導要領に示される各学年の指導内容は、常に下の学年の指導内容が基礎になる。しかも、基本となる重要事項は、易から難へ、螺旋的・反復的に繰り返されていく。指導内容は児童・生徒一人一人が確実に身に付けるものとして構成されている。段落もそうした考えのもとで指導されてきた。しかし、段落意識をもたず、曖昧なままで文章を展開する児童・生徒の実態はあまり変わっていない。

2・2 段落の文の結束性

段落指導の課題は、形式段落と意味段落という呼び方にも表れている。実際、ある高等学校の国語教科書「現代の国語」では、形式段落と意味段落を次のように説明する。

形式段落：文頭が一字下げになっているところから改行までのまとまり。

意味段落：文章を論理展開によって分けたうちの一まとまり。一つ以上の形式段落からなる。

ここから読み取れることが二つある。一つは、段落が文頭の一字下げで識別できる形式段落と、それが一つ以上集まった意味段落の二重構造になっていること。もう一つは、意味段落がパラグラフに近いことである。こうした段落の捉え方は小学校から高等学校までの国語教科書に共通している。なぜなら、教科書は学習指導要領を基に作られているからである。

段落の二重構造は便利な反面、段落を形骸化し、段落の文の結束性に目を向けにくくする。つまり、段落意識が育ちにくい状況を作り出す。また、文と文の接続方法に、接続表現（接続語）、指示表現（代名詞・副詞・連体詞）、同語・類語の繰り返し、時間の経過・空間の連続、省略表現（主語等の省略）などがある一方で、それらを接続方法として自覚し、使ってみようとするレベルには至っていない。

段落指導の現状を改善するには、パラグラフの規則性に倣って、段落の主題の統一性と文の結束性に気付かせる工夫が必要である。省略表現や、文と文の間にはギャップがある。意味が通るようにするために、読み手は想像力でギャップを埋めていかなければならない。また、書き手は理解を妨げる接続表現の多用を避けるために、文脈による接続にも積極的に挑戦していくことが求められる。

おわりに

論理的文章の目的は、読み手を説得することにある。それには、常に読み手の立場で考え、読み手の反論を想定し、自分の考えの正しさを客観的な理由と事例を基に説明しなければならない。自分の頭に浮かんだ順番でそのまま書き並べても、支離滅裂になったり論理が破綻したりする。

読み手の立場や反応を想定しない、一方的な書き方が読み手を納得させることはできない。たとえ自分の考えが正しいものとしても、未整理のままで書き始めたら、文章表現に漏れやダブリ、矛盾が生じ、読み手が理解不能になることは容易に想像できる。

明瞭な論理展開は、確かな考え（結論）とそれを支える文の集合体が緊密につながることで可能になる。有力な方法の一つとして、まず、段落の冒頭にトピック・センテンスを置くこと。次に、接続表現や指示表現、省略表現など、文と文の接続方法があることを知り、それを効果的、継続的に使っていく意識が求められる。パラグラフの要素を段落指導に活かしていく意味もそこにある。

引用・参考文献

- 1)木下是雄レポートの組み立て方.筑摩書房:180-181,1994
- 2)佐渡島沙織,吉野亜矢子.これから研究を書くひとのためのガイドブック.ひつじ書房:33,2008
- 3)橋内武.パラグラフ・ライティング.研究社出版:14-17,1995
- 4)森岡健二.文章構成法.東海大学出版会:77-85,1989
- 5)「五十嵐力.新文章講話(1909)」国語教育指導用語辞典.教育出版:27,1984
- 6)文部科学省.小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編:2018
- 7)古郡廷治.論文・レポートの文章作成技法.日本エディタースクール出版部:2006